

書 評 と 紹 介

千田忠男著

『現代の労働負担』

評者：酒井 一博

著者は同志社大学文学部文学研究科教授であり、医学博士であって、卒業は獣医学部である。社会的な活動として、日本社会医学会理事を務め、また現代労働負担研究会の代表世話人を勤める。この経歴をみれば、優秀な学徒だが一風変わった経歴の持ち主である。本書で展開される現代労働に対するユニークな視点と、労働負担に強い関心を寄せる著者のパッションは、この経歴と無縁ではなさそうである。

本書の力点は、書名の通り「現代の労働負担」の分析にある。「現代」の労働状況と、労働負担の担われ方をしっかりと見ていけば、仕事の喜びと達成感を実感するような労働のもつ本来の負担からかけ離れ、たとえば、ストレスの重積、疲労蓄積、危険性の増大などが露わになるような現代の労働負担の特質が鮮やかに浮き彫りになることを示したことである。

分析の枠組み

本来の労働負担との対比において、現代の労働負担の特質を浮き彫りにするために、時間をかけた地道な分析を繰り返しているが、その結果、現代社会の労働を痛烈に批判することになっ

ている点が興味深い。快作である。

研究方法の中心は、労働者からの聞き取り調査である。本文中には、労働負担を捉える方法として、労働者の生理反応や心理反応を計測・評価する方法のあることも記述されているが、そうした方法は一切とっていない。労働者から聞き取りされた内容から、現代の労働負担の特質を記述する方法に徹している。問題は、聞き取り内容の分析方法であるが、著者は、序章で労働負担の分析の枠組みを、提供している。それは、図表2の労働負担の分析モデル（15ページ）や、図表3の労働負担と生産性向上との関係（20ページ）で端的に示されている。これらのモデルが著者の仮説に当たる。

たとえば、図表3の内容を読みとれば、近年、協同労働の発展や労働手段の発達に裏付けられて労働様式の変化が起こっており、同時に労働密度や労働時間の変化など、労働諸条件の変化を促している。これらの変化は、労働態様や労働のリズム性、さらには持続時間の変化など、労働負荷の変化として労働者に発揮されるが、こうした一連の変化は、それらを担う労働者の労働負担が変化する可能性を指し示していると、著者は捉えている。この労働負担が変化する可能性として2つの方向性を示唆している。第1の可能性については、「同種同量を同程度の労働密度でより短時間に生産するならば、本来の労働負担の軽減につながる」としている。これに対して、第2の可能性として、「労働態様の変化を利用してリズムを加速させ持続時間を延長するならば、現代の労働負担の増大につながる」としている。著者は、本来の労働負担であるべき現代の労働が、現実をみればそうならないことに着目する。労働者に過重な負

担を担わせる実態を探り、なぜ、そうになってしまうのか。この現代労働の仕組みを3つの分野における聞き取り調査によって、明らかにすることを試みている。これが本書の骨格に当たる部分である。第1章は「製造部門における労働負担」で、トヨタシステムを導入直後の山武ハネウエルで調査を行った。第2章は、「技術・事務労働の負担」だが、実際にはコンピューター利用の負担と取り組んでいる。第3章は、「教育労働の負担」で、教師の労働と正面から対峙している。このように現代労働を、著者はトヨタの生産方式の下で働く労働者、コンピューター利用の労働者、教育場面で葛藤する教師を取り上げることで、現代の労働負担の特質を浮き彫りにする手法をとっている。

最終の第4章では、見出しにあるように、「合理的で人間らしく働く」ために、「現代の労働負担」から脱出を図り、「本来的な労働負担」となるための対策を提唱している。著者は学術として「労働負担」論を展開し、これからの労働のありようを提案しているが、その底流にあるのは、「合理的で人間らしく働くため」の「本来的労働負担」の復権にあると読みとった。

分析の方法論

現代の労働負担の特質を明らかにするために著者がとった方法論は、労働者からの聞き取りである。しかし、ルポルタージュとは明らかに一線を画した方法によって聞き取り調査の分析をすすめている。それは序章において、労働様式の変化 労働諸条件の変化 労働負荷の変化 労働負担が変化する2つの可能性といった分析の枠組みを示しているが、聞き取った内容をその枠組みにそって再構成する方法を採用している。いわば、仮説検証的な手法によって、聞き取り調査の分析をすすめたとみてとれる。

本書を読んだ印象からいえば、この仮説検証が成功している部分と、半面、聞き取りだけで

はどうしてもエビデンスが不足するために、記述に同意しきれない部分とが同居している。本書に説得力があるとみえるのは、ひとえに著者の構想力によるものであるが、それだけに著者の記述に読者が無批判的に吸い込まれてしまうこと、ある種の「危なさ」のあることを禁じ得ない。それは調査方法についての妥当性に由来することである。

この種の聞き取り調査を企画することの難しさは理解できる。それでも本研究の客観性と妥当性を検討する上で、あえて2つの点を指摘したい。その第1は、対象者の抽出法についてである。本書のように、聞き取り調査のみで、全体の分析が行われる以上、「誰から」の聞き取りであるかは、非常に重要であるはずだが、その点の物足りなさが残る。それは調査デザインの問題である。第1章の製造部門では、トヨタシステム導入に批判的な労働運動団体から紹介を受けた8名の労働者、第2章の技術・事務労働では、第1節が1名、第2節が5名、第3章の教育労働では、10名の現役教師が聞き取りの対象者である。これで現代の労働負担論を全面展開しようとするのはややゆきすぎである。もし、全面展開したとすれば、その結果にバイアスがかかっていないか、疑わなければならなくなる。読者にその点の判断ができる材料、たとえばこれらの聞き取り対象者たちの属性を含めた関連情報についての詳細な記述が必要である。

第2は、聞き取り調査の協力を得ることが難しいことを勘案しても、やはり、本書で主張される現代の労働負担の特性に客観性のあることを、エビデンスで示す必要がある。その実証性は、労働負担研究では非常に重要な点である。

評者の個人的な好みからいえば、読み応えがあったのは、第3章の「教育労働の負担」である。とくに、第1節の「教育労働と負担の実際」において、現役教師10人からの聞き取りにもと

づき、教育実践そのもの、教育実践の魅力と厳しさ、校務分掌、しんどいことが重なったときの心身の様態、しんどいことが重なる経過の順に書き込んでいく著者の筆力は確かなものがあり、教員のおかれている状況と労働負担の特質記述に、引き込まれながら読みつづけた。一例を示そう。

「子どもたちの人間形成の一助になりたい、成長させようという思いをもっている。」(197ページ)、「これまで(今もそうだが)、走り回る、重い子どもを持ち上げる、押さえつける、飛び出さないように力づくで抑えるなどは、肉体的には大変なこととは思っていない。しかし、精神的には、たいへんな思いをした。『その子のしんどさを受け止めて、共感していくものが私にはない』と実感したことだ」(202ページ)、「あとあと考えても、ものすごく疲れた、ストレスになったという実感が残る。あの時間のあの会議は何だったのだ。相手の威圧的な態度に私はすごく傷ついた。自信たっぷりに対応してくるし、すごくバカにした言い方もしてくる。」(216ページ)、「夜眠れない、朝早く目が覚めてしまう、酒・たばこの量がいっきに増える。何をやっても頭から抜けない。ついついコンチクショウという思いがでてくる。自分自身の視野がものすごく狭くなっているな—とも感じる。」(218ページ)

「製造部門における労働負担」に関する記述は、いささか気負いすぎの感がある。前述したように、この章の聞き取りの対象労働者は、トヨタシステム導入に批判的な労働運動団体から紹介を受けたと断りがある。このことに問題はないが、その結果、トヨタシステムに批判的な意見が主流を占めるようになるのは明らかである。要は、批判勢力の人たちからの聞き取りに費やした時間と同程度の時間を、このシステムを推進した人たちにも与え、その意見を掲載す

べきである。また、そうすることで現代の労働負担の特質に深みがでることは明らかである。雑誌記事からの引用だけでは(25~35ページ)、あまりにもバランスが悪い。

「技術・事務労働の負担」は、著者の分析より現実の進行の方が早いとの印象をもった。現時点で読むと、「問題の所在」がややずれているように感じる。ただし、この責任は著者にあるわけではない。そうした流れの速さの中で、多くの技術者たちが新しい技術への適応に、四苦八苦しているのが、現実の姿といえよう。

労働負担軽減の対策

最終の4章は、合理的で人間らしく働くための提案が語られる。ことに第4節で、雇用される労働者の負担軽減に向けた総括が行われている。結論は次の3点である。「第1に、雇用される労働者は、仕事に熱心になる。第2に、実際に仕事をすすめる関係の中では、働き過ぎを促進する要因が強化される。第3に、したがって、過重な労働負担を軽減し適正な働き方を実現するためには、その時代の生産力の発展状況に見合った、あるいはその可能性を十分にくみ取れるような社会規範を確立し、それに向けた政策的対応が求められる。何よりも現代にふさわしい労働基準を確立し、厳正に実施することが必要である」とした。

その通りであるが、現代の厳しい労働負担を担いながら、本来的労働負担への転換の道筋を希求する多くの労働者たちは、この結論では納得できないように思う。とりわけ本書に登場した労働者たちは自分たちが職場で実践できるような対策を望んでいるはずである。そのことを一番よく知っている著者に、次のステップとして労働負担対策論の刊行を期待したい。

(千田忠男著『現代の労働負担』文理閣、2003年2月刊、301頁、定価6,000円+税)

(さかい・かずひろ 労働科学研究所)